

北海道民話の研究 (その4)

——北海道・北広島市「大蛇神社」伝説の考察——

阿部 敏夫

目次

はじめに

第1章 大蛇神社関連文献一覧 (年月順)

第2章 大蛇神社に関する文章 (年月順)

第3章 大蛇神社伝説の生成 (語り手等)
の背景

第1節 移住前

第2節 語り手とその家族

第4章 伝説の内容 (原話から現在まで)

第1節 伝承の異同

第2節 上記以外の伝承

第5章 紙芝居〔図像〕(視覚化)の変遷

第6章 まとめ

謝辞

注

参考文献

鍵語：岸本トモ・大谷義明・北広島市 (村・町)

はじめに

「大蛇神社跡」碑は現在北広島市北の里渡辺忠宅の庭内にある。その形状は高さ135.5cm, 横150cmで平成十年九月に建立された。正面は当時の首長が「大蛇神社跡」と揮毫し、背面は碑建立の経緯が記されている。この神社にまつわる話は次のような内容である。

旧広島村に入植した久保武右エ門はうっそうと茂る原始林を切り倒しながら開墾に精を出していた。樹齢数百年のタモの大木を切り倒したその夜、寝ている枕元に長い黒髪の女が現れ、「火を消してください。」と武右エ門

に頼むのだった。しかし、算段通り切り倒して焼き払った。四日間同じことを言いながら女は枕元に現れたが、その容姿は老婆のようになり、最後には白骨同様な姿になって頼むのだった。火は七日七晩も燃え続けて消えた。そしてタモの木の洞を見ると大蛇の白骨死体があった。武右エ門が祟りを恐れて供養したのが大蛇神社の始まりである。しかし、その後武右エ門の家族やその土地の次の所有者の家族にも原因不明の不幸が重なったというのである。占い師や神主にお払いしてもらって、何事も起こらなくなったというのである。

この伝説は1967年(昭和42)岸本トモ(当時93歳)によって語られたことに始まる⁽¹⁾。当初は「蛇の神社」と呼ばれていたが、その後「大蛇神社」と呼ばれるようになり、近辺の人達が祠を作りお参りしていた。そして、地域の郷土史家・図書館関係者等によって新聞、写真集、紙芝居、郷土絵本、郷土史等に次々と伝承されて今日に至っている。この伝説の背景には、蛇や蛙等を「(動物を)生殺しにしてはいけない。」という俗信(禁忌)伝承もある。また、大蛇供養以後の家族の不幸は肺病と呼ばれていた病気が本当の理由であったらしい。

上記のことから民間説話=口承文芸(この場合は伝説・俗信等)は常に創り出されているということがわかる。従って、「口承文芸

キーワード：岸本トモ、大谷義明、広島村(町、市)

研究のこれから」を考える時、短い期間(百年位)に地域の郷土史家・図書館関係者等によって生成されてゆく民間説話をも含めて考えなければならないだろう。

私は以上のような課題意識で第1, 2章では、現在までに刊行されている「大蛇神社」に関する書籍・郷土史研究会機関誌・紙芝居・観光ガイド誌の〔名〕〔本文〕を年月順に整理した。第3章では、伝説生成の背景、第4章では伝説の内容(モチーフ)を考察した。第5章では、紙芝居の〔図像〕の変遷、伝説生成の関与者達を考察した。そして、最後に今回の伝説考察のまとめを行う。

第1章 伝説〔大蛇神社〕関連文献一覧

下記のように現在まで書籍、研究会機関誌、紙芝居等が「21」刊行されている。年月順に整理すると以下ようになる。

- 〔1〕『郷土研究 広島村』第1号 広島村郷土史研究会 広島村考古学研究会開村80周年 山本優編集 50p 26cm 昭和42年〔1967〕1月(22p～)
- 〔2〕『郷土研究 ひろしま』第3号大谷義明編著 広島町郷土史研究会 広島町考古学研究会 昭和52年〔1977〕5月 57p(5p～) 26cm
- 〔3〕『写真でみる広島のあゆみ』広島町役場 昭和59年〔1984〕185p(141p) 30cm
- 〔4〕『郷土大型紙しばい』(*大人の絵)昭和59年〔1984〕55×80cm 9枚
- 〔5〕『北の語り』創刊号 加藤芳江著 北海道口承文芸研究会 1985年〔昭和60〕9月 51p(41p) 21cm
- 〔6〕『あの世からのことづけ』松谷みよ子著 筑摩書房 1984年〔昭和59〕12月

202p(151p) 20cm

- 〔7〕『研究 郷土史ひろしま』大谷義明編著 広島町郷土史研究会 昭和61年6月
- 〔8〕『北の語り』第3号 北海道口承文芸研究会 1988年〔昭和63〕1月 21cm 126p(64p)・木村正雄著「大蛇神社異聞」
- 〔9〕『北海道昔ばなし』道央編 北海道口承文芸研究会 平成元年9月
- 〔10〕『郷土の歴史ガイド ひろしま歴史散歩』広島町教育委員会 平成4年〔1992〕3月 66p(33p) 18cm
- 〔11〕『北の語り』第8号 北海道口承文芸研究会 1994年 1月(71p) 21cm 125p
- 〔12〕『北海道おどろおどろ物語』合田一道著 函館・幻洋社 平成7年〔1995〕8月 290p(56p) 17cm
- 〔13〕『郷土絵本づくり(採話)』(*テープ有り)聞き手坪谷京子 平成7年〔1995〕
- 〔14〕『郷土研究 ひろしま』広島町郷土史研究会(合冊・創刊号～第8号)大谷義明編著 文楽館 平成8年〔1996〕5月
- 〔15〕『郷土の絵本2 だいじゃ神社』北広島市教育委員会編発行 平成8年〔1996〕9月(*紙芝居も兼用)原画17枚 38×54cm
- 〔16〕『郷土誌「北の里のあゆみ」』郷土誌編集委員会 1996年〔平成8〕9月 253p(161p) 22cm
- 〔17〕『きたひろしま歴史散歩(改訂版)』北広島市教育委員会 平成8年〔1996〕11月 68p(34p) 18cm
- 〔18〕『北広島のあゆみ』札幌・弘文社 平成8年〔1996〕12月 86p(67p) 30cm
- 〔19〕『郷土紙芝居 11話 きたひろ昔あったとさ』北広島市図書館 ゆずり葉の会(*解説書・稿本有) 平成15年

[2003] 8月

[20] 『写真でみる北広島のあゆみ』（開村120年）北広島市 弘文社 平成16年 [2004] 1月 185p（149p）30cm

[21] 『郷土研究 北ひろしま 新版 碑は語る』第18号 大谷義明編著 北広島郷土史研究会 平成17年 [2005] 12月

第2章 大蛇神社の内容の変遷

伝説の内容（関連記事部分）を年月順に整理すると以下のようになる。

[1] 『郷土研究 広島村』第1号 広島村郷土史研究会 広島村考古学研究会 開村80周年 山本優編集 昭和42年 [1967] 1月

広島県高宮郡九村 岸本権平 移住日
明治17年5月23日

聞き手：酒井喜重

話者：岸本トモ

隣家の久保と岸本の間境界にヤチダモの老木が空虚になって立っていた。開墾する度にヨシの根や竹の根等を老木の回りに何年も積み重ねてきた。久保はその芥山に火をつけたところ約一週間に亘って燃え続けた。四日目頃から今迄赤く燃えていた火が青い火となって燃え続けた。その後老木の根元から紫色の油が流れ出てきた。久保は燃えのこりの老木に梯子をかけ空虚を覗いて見ると、白骨となった大蛇が丸く髑髏を巻きその真ん中に五寸角程もある頭の骨がのっかっていた。久保はその骨を家に持ち帰った。或日、江別から骨の話聞いた老人が来て大蛇の骨はオコリ（マラリア病）によくきく薬であるから譲ってくれと云ってきた者もあった。大蛇は「海に千年、山に千年、この世に千年いて三千年すると天界に昇って行く」と云う物語があった。トモ老母の話はとめどもなく続いた。

[2] 『郷土研究 ひろしま』第3号 大谷義明編著 広島町郷土史研究会 広島町考古学研究会 昭和52年 [1977] 5月 ひろしま昔ばなし 大谷義明

広島市街から共栄を過ぎて北へ約三軒で裏ノ沢川に達する。川の手前を右に曲がり、羽幌町に向かって川に沿い約二百米あまり行くと、そこが岸本兼松さんのお宅である。

岸本兼松さんの祖父権平は明治十七年、和田郁次郎に従ってこの広島に入地して以来、九十年三代に涉って努力し、今日の地位を築かれた広島では最も古い御家柄であるが、その岸本さんも他の人達と同様開墾当時は今では想像も出来ないようくろうの連続であった。

岸本兼松さんの母親トモさんは次の様に語った事があった。

「住居は葎茸きか草茸き、土間には草を敷き並べその上に筵を敷いて寝た。醤油樽を真ん中から切り、一つは足をふくの、他の一つは顔を洗うのに使った。稲穂が出せろう頃、霜害のため収穫皆無になったため満足に喰べるものがなく、フキ、オンバイロ、ヨモギ等もよく喰べた。又馬鈴薯が常食で、その中にオンバイロが沢山這入って居り、子供心にも、オンバイロを除いて薯を沢山入れて下さいとせがんだこともあった」

そんな生活であった。

又、開墾の方法も、明治二十二年、北海道庁発行の「北海道農業手引草」と云う開墾の為の案内書があるが、それに依ると、「移住地に着の上は、直に伐木に取掛るべし。立木は雪際より切倒し、幹の直なるものは居小屋、又は納屋材とすべし。左なきものは薪其の他の需要に供し、其の他用に堪えざるべきものは取まとめて焼捨てるを常とす。雪消の後、前に伐置きたる大木の根株はなるべく掘取りて、之を小柴と共にかき集めて焼払い、漸次、開墾に着手す

べし」

こんな風にして鍬入れが始るのであるが、笹の根が網の目のよう、一鍬耕すのにも数回打込み、ようやく一鍬起すと云ふ程度、その労力は莫大なものであった。

土地が乾燥するのを待って、笹の根、木の根など集めて焼払うので天気の良い時などは数条の煙が立のぼっているのが開墾の地の風景であった。

明治三十年の頃の事であった。岸本さんの隣家は、やはり明治十七年、岸本さんと一緒に入地した仲間の一人、久保武右エ門である。この久保さんと、岸本さんの土地の境界に、数百年を経て、直径二米にも余るタモの老木が立っていた。この老木も寄る年波には勝てず、すっかり空洞になっていて用途のないまゝ開墾の邪魔になる木の根、竹の根などをそのまわりに何年も積み重ねて来たが、ある時、久保さんは焼払おうとして、之に火をつけたのである。

忽ち、真っ赤な炎をあげて燃上り、約一週間にも涉って、燃え続けることになるが、四日目頃から、今迄赤く燃えていた炎が青い色に変わり、其後この木の根元から紫色の脂が流れ出て来た。不思議に思った久保が燃え残った老木に梯子をかけて、空洞の中を覗いて見たが、思わず転げ落ちんばかりに吃驚したのである。空洞の中に、今は焼かれてすっかり白骨となった大蛇が丸くどくろを巻き、真ん中には十五糎程もある頭の骨が乗っていて、大きく口を開き、苦悶した様子さえ見えるのである。

久保はその骨を持ち帰って自宅に祀った。或日、江別からこの話をきいたと云ふ老人が来て、大蛇の骨はオコリ(マラリヤ病)によく効く薬、是非、譲って欲しいと云って来たりした。

然し、大蛇は「海に千年、山に千年、この地上に千年、三千年をこの世で修業し、許されて龍となって天上に昇って行く。」

と伝えられている魔力を持った動物、知らない事とはいいながら、これを焼き殺して終わったのである。祟(たたり)を恐れた人達は焼き残った老木の傍らに小さな祠を建て、この大蛇の霊を祀った。これが後年「大蛇神社」と呼ばれるようになったのであるが、これを建てたのは、やはり明治十七年、岸本さんや、久保さんと同時にこの広島に移住した流田辰次郎であったといわれている。

其後、昭和の初め、その頃、ホロンベツ川と呼ばれていた現在の裏の沢川が大水害のため氾濫し、この大蛇神社をも押し流して終った。その為、現在はその後さえも残っていない。

(この稿は昭和四十一年九十三才で没した岸本トモさんの話を酒井喜重氏が記録したものと、現在八十三才で御元気な岸本兼松さんの話を参照した。)

〔3〕『写真でみる広島のあゆみ 開村100年』

広島町役場 昭和59年 [1984]

大蛇神社跡の碑

明治三十年頃、野幌原始林の裏を流れて北の里に通じている裏の沢川の辺りに、渡辺忠さんの祖父が住んでいた。

当時、大蛇の霊を慰めるため、地域の人々に手によって建てられた小さな祠の大蛇神社が渡辺さんの所にあった。だが、昭和の初め頃、その川が大洪水のため、氾濫して大蛇神社は押し流されてしまい、跡形もなくなってしまった。それから時が経ち、平成十年に、忠さんが当時の開拓時代の労苦を偲び、後世に語り継ぐため、自分の敷地内にあった当時の祠の辺りに大蛇神社跡の碑を建立した。

●大蛇神社に纏わる話

明治十七年に入地した岸本権平さんと久保武右エ門さんの土地の境界に、数百年を

経た直径二メートルの大きなタモの老木が立っていました。その老木は中が空洞になっていて、回りには開墾の邪魔になる木の根や笹の根が積み重ねてありました。

明治三十年のある日、武右エ門はそれに火をつけて燃やしたのです。火はたちまち真っ赤な炎をあげて約七日間にも渉って燃え続けました。

その間、武右エ門は毎晩夢を見ました。最初の夜は長い髪の美しい女性が現われ、「火を消して下さい、火を消して下さい」と。次の日の夜は髪をふり乱し、疲れた様子で「火を消して下さい、火を消して下さい」と。三日目の夜は髪を抜け落ち、皮膚はたれ下がって老婆のような姿になって、「火を消して下さい、火を消してー」と。

四日目に現われた時には白骨同様な姿で、苦しそうに「火を消して下さい、火を一」と手を合わせて頼むのでした。

この不思議な夢に眠れない夜を過ごした武右エ門は身も心もすっかり疲れ果てていました。

ところが、五日目の朝、目を覚まして燃え残りのタモの木を見ると今まで赤く燃えていた炎が青白い色に変わり、その後、タモの木の根元から紫色の脂が流れ出ているのを見て、武右エ門は「はっー」と気づいて、そのタモの木にははしごをかけて空洞の中をのぞいて見て驚きました。空洞の中には何と、丸くとぐるを巻いた大蛇の白骨死体があったのです。

大蛇の頭は十五センチほど大きく口をあけて、まるで苦しい戦いをした様子さえ見えました。

武右エ門は「毎晩、俺の夢枕に現われて『火を消して下さい、…』と、頼んでいた長い髪の女性は“大蛇の化身”だったのか」と思うと、急に体中に寒気がしてきたのでした。

大蛇は「海に千年、山に千年、この地上

に千年と、三千年をこの世で修行し、神様に許されて龍となって天に昇って行く」と伝えられている魔力を持った動物。知らない事とは言いながら、その大蛇を焼き殺してしまったのでした。

この話を聞き、祟りを恐れた村人たちは焼け残ったタモの老木の傍に小さな祠を建て、大蛇の霊を祀ったのです。

この祠が後年「大蛇神社」と呼ばれるようになったのです。

だが武右エ門一家には不幸な事が続きました。大事な三人の息子が働き手になる年頃になると不思議な病にかかり、次々と死んでしまったのです。

武右エ門一家は寂しさのあまり、この地を手ばなし、他の地を求めて立ち去って行ったのでした。

大蛇の祟りはそれだけで終りませんでした。

武右エ門さんの後に入ったのが渡辺さんでした。その渡辺さんの牛や馬が原因不明で次々に死んでいくのです。困り果てた渡辺さんは“占い師”に相談して、占いに従って家畜舎を改造し、神主さんに「おはらい」をしてもらいました。

それからは、牛や馬に怪我や災難がなくなり、その後、大蛇の祟りの話を聞かなくなりました。

〔4〕『郷土大型紙しばい』（*大人の絵）昭和59年 [1984] 55×80cm 9枚

「大蛇神社」（『郷土研究 ひろしま』より大谷義明著）10p

絵 岡部好子

かたり 高橋かおる

文 加藤好江

（第5回 読者まつり ひろしま100年記念製作）



①このお話は、90年ほど前、つまり広島の村ができて十才頃のお話です。

そのころの広島は、大きな木や草が、あたり一面におい茂っていました。



②「えいっ！」カーン カーン
「メキッ メキッ」 ズシーン

大きな木や草を切り倒し、乾くのを待っては火をつけて燃やし、作物を作るための土地を広げていくのです。

ですから、そのころは、草木を燃やす火けむりが、あちこちに立ち上っているのが見られました。

武右之門さんという男も、毎日陽がのぼるよりも早く起き出しては、木を倒したり土地をたがやしたりしておりました。

③この武右之門さんの家の近くに、大きなタモの木が生えていました。
それはそれは大きな木で、大人が四人、大

きく手を広げてつないでも、かかえられない位大きい木でした。

年をとりすぎていたせいでしょうか、その木の中側は、からっぽになっていました。何しろあんまりばかでかい木でしたので武右之門さんは、その木に手をつけずに、まわりにいらぬ木や竹や、葉っぱなどを積み重ねておきました。



④ある日、武右之門さんは、そのつみ上げた葉っぱなどを燃やすことにしました。

「パチ パチ」

「ボーッ」

火のはぜる音がして、赤い炎が立ちあがりました。

「パチ パチ」

「ボーッ」

その火は、それからなんと、昼も夜も、一週間も、もえつづけたのです。



⑤火は、まだもえつづけています。

そんなある夜のこと武右エ門さんの寝ているまくらもとに、しっとりとぬれた目をした、とても美しい娘が悲しそうな顔で立っ

ていてこういうのです。

「火を消して下さい。」

「火を消して下さい。」

武右エ門さんはびっくりしてとび起きしましたが、娘は消えてしまいました。



⑥つぎの日の夜

今度はつかれはてた顔をした娘が現われてまた、

「火を消して下さい。」

「火を消して下さい。」

とたのむのです。

三日目の夜

髪の毛がすっかりぬけ落ちてしまい、老婆のように変わりはててしまった娘が、武右之門さんに、必死になって訴えるのです。

「火を消してください。」

「どうか火を消して下さい。」



⑦そして、最後の夜（には）、

娘はとうとう白骨となってしまった姿であられ、武右エ門さんに一生懸命たのむのです。

「火を消して下さい。」

「お願いですから早く火を消して下さい。」

武右乃門さんはハッと気がつきました。

今まで赤々ともえつづけていた火柱の炎が、四日目ごろには、青白くかわってしまったこと（や）、タモの木の根元から紫色の油が流れ出していたのを、思い出したのです。



⑧武右エ門さんは、タモの木の所へ急いで行ってみました。

（武右エ門さんは）もえ残ったタモの木にはしごをかけて中をのぞきました。

そしてびっくり！あやうくはしごから落ちこちるところでした。

なんと、そのタモの木の中には大きな口を天にむけて、とぐろをまいた一匹きの大きなヘビの白骨化した死骸があったのです。

「夢の中にでてきた娘は、この大蛇の霊だったにちがいない。知らないこととはいえ、とんだことをしてしまった！」

武右エ門さんは、この骨を家に持ち帰り、一生懸命おまいりをしました。



⑨その話を聞いた近所の人たちも蛇のたたりをおそれて、やけ残ったタモの木のそばに

みんなで力を合わせて小さなほこらを作って死んだ蛇の霊をなぐさめました。

これが後に大蛇神社とよばれるようになり、おまいりをする人もたくさんいたということです。



しかし、今から七〇年ほど前、広島が大洪水にみまわれて大蛇神社もすっかり流されてしまい、お話だけが、語りつがれて残っているのです。

〔5〕『北の語り』創刊号 加藤芳江著 北海道口承文芸研究会 1985年 [昭和60] 9月

広島町の大蛇の話 加藤好江

それは、いまだ開墾の苦労が続いている明治三十年頃の札幌郡広島村でのことです。数百年を経て直径が二m余りもあるタモの老木木が大きすぎて取り残され、周りに開墾の際邪魔になる笹や木の根を何年も積み重ねておりました。それを或日大木ごと焼き払おうということになり、火がつけられました。

この火は一週間燃え続けたそうです。ところが赤々と燃え上がっていた炎が、四日目頃から青白く変わり、その上、木の根元から紫色の脂も流れ出てきました。不思議に思った男が焼け残った老木に梯子をかけて空洞をのぞいてびっくりしました。なんとそこには、焼けて白骨化し丸くとぐろを巻いた大蛇がいました。カッと大きく開けら

れた口を持つ頭部は十五cmあったということです。

驚き恐れた男はこの大蛇の骨を自宅に持ち帰り、手厚く葬りました。また古くから伝わる大蛇の魔力と祟りを恐れた近所の人々が、この木の傍に小さな祠を建て、大蛇の霊を祀りました。これが後に「大蛇神社」と呼ばれ、近隣の人々の信仰を受けていました。残念ながらこれも昭和初期の大洪水で流され、現在は跡形もありません。

ところでこの話は後があります。件の男はその後毎夜夢にうなされるようになりました。最初の夜は若く美しい娘が現われ、“熱い！火を消して”と訴え続けました。ところが気味の悪いことに、この娘は夢の中で少しずつ年齢をとって現われたのだそうです。若く美しい娘はやがて中年の女になり、そして遂にはよぼよぼの老婆と変わりました。この老婆が“熱い！火を消しておくれ”というのを最後に、夢は終わりました。けれどもこの男はこの後なす事が万事うまくいかなくなり、とうとう広島を去っていったそうです。

この話は広島で家庭文庫をなさっている荒木順子さんから伺いました。荒木さんは大谷義明さんからおききしたということです。大谷さんは、この話の前半を、すでに故人の岸本トモさんの話を酒井喜重さんが記録されたものと岸本兼松さんの話を参照されて、自著『郷土研究ひろしま』第三号に「大蛇神社」と題してのせておられます。

〔6〕「あの世からのことづけ」(『私の遠野物語』) 松谷みよ子著 筑摩書房 1984年 [昭和59] 12月

大蛇を焼く

これも大蛇の話である。それも北海道の大蛇である。

開拓が始まった頃というから明治二十年

代だろうか。札幌と千歳の間に広島の人たちが集団で開拓に入った。それで広島町という。話は入植当時のつらい時代のできごとという。

開拓者にとってまず最初の仕事は、原始林の木を、一本、一本伐り倒すことから始まる。ヤチダモ、アカダモ、カンカン固いのはイタヤの木。クワヤコブシ、山クルミ。下はびっしりクマザサだった。

さしわたしメートルの木ならごろごろしているこの原生林に、一本、主のように太いタモの木があった。大人三人が手をまわすほどで、なかはすっかり洞になっていたが、衰えたふうもなく、他を圧してそびえていた。

あまりに太いので手をつけるのも後まわしとなり、そのまわりに伐りとった木の根や笹の根を積み上げて何年かたったという。ところがある日、開拓地の持主である男がそろそろこの木も始末しようと、積み上げた枯枝に火を放った。

立木のまま、タモの木は燃えに燃えて一週間燃え続けた。ところが不思議なことに、四日目あたりから赤い炎が青い炎に変わり、やがて木の根元のあたりから紫色の脂が流れ出して、見る人をぎょっとさせた。それはまるで木の精が苦しきもだえてしたたせようであった。

七日経ってようやく火はついた。

火の色や紫色の脂に不審をたてていた男は、ハシゴを焼けた木にたてかけてのぼり、なかをのぞいて仰天した。そこには、とぐろを巻いた大蛇の白骨化した死体があったという。頭には十五センチくらいの大きな口がぱっくりとあいていた。

その夜から男は夢を見るようになった。美しい娘が現われて、熱い熱い、火を消して、ともだえ苦しむ。次の日も、その次の日も、苦しむ娘が現われるのだが、なんと、その娘は夢の中で次第に年をとっていく。

やがて中年になり、しわがふえ、ついには老いさらばえた老婆になり、熱い熱い、火を消してくれと枯木のような手をさしのべたのを最後に、ぼったり夢はみなくなった。しかし、それからというもの、男には不運がつきまとったという。

札幌で、夢の話をします、といってくれた加藤好江さんからの便りであった。そのときは人がたくさんいて思うように聞けなかったのだけれど、届いてみれば恐ろしい話であった。

〔7〕『研究 郷土史ひろしま町』 大谷義明編著 広島町郷土史研究会 昭和61年6月

*〔2〕と同じ内容

〔8〕『北の語り』第3号 北海道口承文芸研究会 1988年〔昭和63〕1月 木村正雄「大蛇神社異聞」

老木が焼かれたとき、そのほら穴に大蛇がいた話は、「北の語り」創刊号に加藤好江さんが紹介されている。その大蛇の話が、数キロ離れた音江別では「岸本さん方の老木の根っ子に、たくさん蛇が集まっていた、焼け後に千四百分の骨が残っていた」とは、石橋豊次郎氏が父から聞いた話という。これは別な蛇だが、島松軟石山で、岩のさげ目に大きな白蛇が冬眠していて、軟石を切ったときに出て来たという。

（島松 中山要二郎談）

〔9〕『北海道昔ばなし』道央編 北海道口承文芸研究会 平成元年9月

*〔5〕と同じ内容

〔10〕『郷土の歴史ガイド ひろしま歴史散歩』 広島町教育委員会 平成4年〔1992〕3月

北広島むかし話しく大蛇神社>

明治17年に入植した久保武右エ門さんが畑仕事にじゃまになる大きな老木を焼いたときの話です。

今の北の里に入植した武右エ門さんと、となりの畑の境界に、数百年もたっているような直径2mほどのタモの老木がたっていました。老木なので、すっかり空洞になっていて使い道もなかったのに、木の根や、笹、竹などを周りに積み重ねていました。それでもだんだんじゃまになり焼き払おうと火をつけると、何と、一週間も燃え続けたということです。不思議なことに四日頃には真っ赤に燃えていた炎が青白く変わり、木の根元から紫色の脂が流れ出しました。

その頃から武右エ門さんは、毎晩のように夢を見るようになりました。夢は最初美しい娘が「火を消してください」と頼むのです。次の日からは、その女はだんだん年をとっていき、最後にはガイコツになった姿で「お願いします、火を消してください」と頼むのです。武右エ門さんは驚いて、老木のほころの中をのぞいてみると15cm程もある頭をした大蛇がとぐろを巻き大きく口を開いていたということです。ヘビのたたりを恐れて、老木のあったところに村の人達と小さなほころをたてお参りをしました。それで「大蛇神社」と呼ばれるようになりましたが、60年程前の大洪水でほころも流され、今はお話だけが語りつがれています。

- [17] 「郷土の歴史ガイド きたひろしま歴史散歩(改訂版)」北広島市教育委員会 1996(平成8)年11月29日発行

* [10] と同じ内容

- [11] 『北の語り』8号 北海道口承文芸研究会 1994年1月

木村正雄「洪水に流れた大蛇神社」

本誌創刊号に、加藤好江氏が広島の大蛇

神社についてかかれているとおり、広島村の代表民話である。その大蛇神社も昭和二十五年(一九五〇)の、裏の沢川(ホロンベツ川)の大水によって流されてしまった。その後、裏の沢川は改修され、あたり一帯は明るく、建てもものも近代的になって、大蛇神社があった当時の面影はどこにもない。

加藤好江「大蛇神社の話」

それは、いまだ開墾の苦勞の続いている明治三十年頃の札幌郡広島村でのことです。数百年を経て直径が2m余りもあるタモの老木がありました。既に幹は空洞となっていたその木は大きすぎて取り残され、周りに開墾の際邪魔になる笹や木の根を何年も積み重ねておりました。それをある日大木ごと焼き払おうということになり、火がつけられました。

この火は、一週間燃え続けたそうです。ところが赤々と燃え上がっていた炎が、四日目頃から青白く変わり、その上、木の根元から紫色の脂も流れ出てきました。不思議に思った男が焼け残った老木に梯子をかけて空洞をのぞいてびっくりしました。なんとそこには、焼けて白骨化し丸くとぐろを巻いた大蛇がいました。カッと大きく開けられた口を持つ頭部は15cmあったということです。

驚き恐れた男はこの大蛇の骨を自宅に持ち帰り、手厚く葬りました。また古くから伝わる大蛇の魔力と祟りを恐れた近所の人々が、この木の傍らに小さな祠を建て、大蛇の霊を祀りました。これが後に「大蛇神社」と呼ばれ、近隣の人々の信仰を受けていました。残念ながらこれも昭和初期の大洪水で流され、現在は跡形もありません。

ところでこの話には後があります。件の男はその後毎晩夢にうなされるようになりました。最初の夜は若く美しい娘が現れ、「熱い!火を消して」と訴えました。夜毎



娘は夢の中に現れ、同じく「熱い！火を消して」と訴え続けました。ところが気味の悪いことに、この娘は夢の中で少しずつ年齢をとって現れたのだそうです。若く美しい娘はやがて中年の女になり、そして遂にはよぼよぼの老婆と変わりました。この老婆が「熱い！火を消しておくれ」というのを最後に、夢は終わりました。けれどもこの男はこの後なす事が万事うまくいかなかったり、とうとう広島を去っていったそうです。

この話は広島で家庭文庫をなさっている荒木順子さんから伺いました。荒木さんは大谷義明さんからおききしたということです。大谷さんは、この話の前半を、既に故人の岸本トモさんの話を酒井喜重さんが記録されたものと岸本兼松さんの話を参照されて、自著『郷土研究ひろしま』第三号に「大蛇神社」と題してのせておられます。

（広島・加藤好江 S17生）

[12] 『北海道おどろおどろ物語』 合田一道

著 函館・幻洋社 平成7年 [1995]

8月

焼き殺された大蛇

—大蛇神社の怪奇な由来 広島—

明治はじめ（一八七〇年代）に広島町で

起こった身も凍るような恐ろしい話を『北の語り』から紹介しよう。

広島町は開拓当時、豊平ほか五カ村戸長役場に属していた。この地に入植した武右エ門は毎日早くから樹木の伐採に精を出していた。

武右エ門の土地に樹齢数百年を数える直径二メートルものタモの大木が生えていた。彼は伐り倒した樹木の小枝や竹の根などを集めてはこの大木のまわりに積み重ねた。

何年かして大木の周辺が小山のようになったので、これを焼きはらおうと火をつけた。火はたちまち燃えさかり、夜になってもえんえんと燃え続けた。

その夜、武右エ門の枕元に長い髪の美しい女性が現れ、

「火を消してください、火を消してください」

と言って、そのままいなくなった。朝になり、変な夢を見たものだと思っていると、その夜、また女が現れ、髪振り乱し、目を血走らせながら、

「火を消してください、火を消してください」

と哀願した。

三日目の夜もまた女が現れた。女の髪の毛はすっかり抜け落ち、皮膚も垂れ下がり、まるで老婆のようになっていた。女はかすれた声で、同じ言葉を吐いた。

四日目の夜はもう白骨同様になって現れ、火を消してと繰り返し訴えた。武右エ門は連日の気味悪い女の出現にすっかり疲れ果て、まだ赤々と燃えさかる炎をぼんやり見ている。すると炎の色が急に青白く変わり、タモの根元あたりから紫色の脂のようなものが流れ出てきた。火は七日七晩燃え続けてやっと消えた。

その段階になってはとなった武右エ門は、焼け残ったタモの大木に梯子をかけて

のぼり、空洞になっている幹の中のをのぞくと、大きな口をあけた大蛇がとぐろを巻いたまま白骨になって横たわっていた。

驚いた武右エ門はあの女こそ大蛇の精だったのかと、骨の一部を自宅に祀った。この話を聞いた付近の人々は、たたりを恐れてタモの木のそばに小さな祠を建てて供養した。

だが、武右エ門の家では三人の息子が成人するころになると原因不明の病にかかってつぎつぎに亡くなり、後継者もいなくなつてついに土地を手放さなければならなかった。

大蛇神社は広島町北の里三に建っていたが、現存しない。この土地の所有者は渡辺忠さんという四代目。

「私が若いころはまだ神社がありましたが、放置されたままでした。そんなことからか、うちでもウシがさっぱり育たず、祈祷師に拜んでもらってヘビの好きな酒とタマゴを供えたところ、それからウシがよく子を生んでくれて。偶然なんでしょうか」と不思議そうに語っている。

- [13] 『郷土絵本づくり (採話)』 (*テープあり) 聞き手 坪谷京子 平成7年 [1995]

*この聞き取りの結果が [15] の紙芝居になる。(一覧図表参照)

- [14] 『郷土研究 ひろしま』 広島町郷土史研究会 (合冊・創刊号~第8号) 大谷義明編著 文楽館 平成8年 [1996] 5月

* [2] と同じ内容

- [15] 『郷土の絵本2 だいじゃ神社』 北広島市教育委員会編発行 平成8年 [1996] 9月 (*紙芝居も兼用) 原画17枚



- ① 広島が、まもなく 町から市になるという
あるなつの日・・・
北の里にすんで 50年いじょうも
らくのうをしていた
わたなべさんのおじいさんは にわの
ていれを しながら、
ふと なにかに ひきつけられるように、
おおきな タモの木の ねもとに
すわりました。
おじいんは、 タモの木のまわりを
すりぬけるかぜに、
なつかしい においを かんじました。



- ② 「おじいちゃん なにしてんの？」
まごの かなえちゃんが
かけよってきました。
「ああ・・・むかしのことを
おもいだしていたんだよ」
「ふーん むかしのこと・・・
ねえ、きょうりゅうなんかも いた？」
「あっはっはっはっ・・・
そんな むかしは しらんが、
だいじゃがいた と いうはなしは

あるんだよ」
「だいじゃ？ だいじゃって なに？」
「それは それはな でーっかい
へびのことだ」
「へえー でーっかい へび？
そのおはなし おしえてよ」
「うん そうか・・・ そうだな・・・」



③いまから 100年くらい まえの
ことだよ・・・
そのころ、このあたりは、おおきな
木や ササが おいしげっていたもんだ。
かいたくに はいった 人たちは
まいにち まいにち おのを ふるって
あせを ながしていたんだと。
そんな人たちのなかにな、
武右エ門という人が おった。
武右エ門の はたけのすみっこにな、
それは それは ふるくて おおきな
タモの木が あったんだと。



④武右エ門は、その タモの木を
やきはらおうと おもってな、
その 木のまわりに ササや 木のねを

あつめて 火をつけたんだ。
するとな、
火は ものすごい いきおいで
いっぺんに もえあがったんだ。



⑤その ばんのことだ・・・
ねていた 武右エ門の まくらもとなに、
かみの ながーい きれいな
おんなのひとが でてきてな、
「火を けしてください
火を けしてください」
と いうと そのまま すーっと
いなくなったんだと。



⑥つぎの ばんも、
また おんなのひとが でてきたんだと。
こんどは かみをふりみだしてな
目をまっかにして
「火をけしてください
火をけしてください」
と たのむんだと。
そうして 三日めのばんも
また でてきたんだと。



⑦とうとう 四日めの ばんにはな、
ガイコツみたいなすがたに なってな、
それでもまだ
「火をけしてください
火をけしてください」
と たのむんだと。
武右エ門は、
なんのことだか わからないまま、
つぎの日も タモの木を
もやしつづけたんだと。
すると、 おかしなことに、
タモの木の ねもとから
むらさきいろの あぶらが
ながれてきたんだと。



⑧「これは おかしい」と
きがついた 武右エ門は、
もえのこった木に はしごを かけて
ウロの なかを のぞいたんだと。
したっきゃな 武右エ門は、
おもわず こしをぬかして
ころげおちそうになったんだと。



⑨そのなかにな おっきな 口を
ぱっくり あけた だいじゃが
とぐろをまいたまんま
ガイコツになっていたんだと。



⑩このはなしをきいた むらの人たちは、
だいじゃを かわいそうに おもって、
ほこらを たててあげたんだ。
それから、
むらの人たちは この ほこらを
「だいじゃ神社」と よんで、
おまいりをするように なったんだと。



⑪そのご、 武右エ門は、
むらを でていったんだ。

とうじの かいたくは
たいへんなもんでな、
せいかつに こまった 人たちが
たくさんいたんだ。
その人たちも、 いつのまにか むらを
でていってしまったんだ。



⑫それから しばらくたってな、
ここに入ったのが じいちゃんなんだぞ。
じいちゃんはな、
“ここで うしかいで
せいこうしてみせるぞ！”
と ころろにきめて
らくのうを はじめたんだ。



⑬ところがな、
たいせつな うしや うまが つぎつぎと
びょうきになって しんでしまうんだ。
じいちゃんは、 どうしたらいいかと
くる日も くる日も
ほんとうに こまってしまったんだ。
そしてな、
むらの 人たちに どうしたらいいかと
そうだんしているうちに、

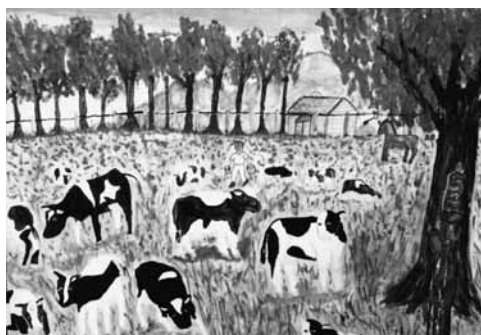
ふと だいじゃ神社のことを
おもいだしたんだ。



⑭じいちゃんはな、 さっそく
へびの だいすきな おさけと たまごを
だいじゃ神社に おそなえしたんだよ。
「どうか らくのうで
みを たてられますように、
めうしが うまれますように」ってな、
まいにち まいにち おまいりしたんだ。



⑮すると なんと ふしぎなことに、
だんだんと うしや うまの びょうきや
ケガも なーんも なくなってな、
そのうえ めうしが



つぎつぎと うまれたんだよ。
じいちゃんのうちにもな、
やっ と わらいごえが でてきたんだ。
そのときは ほんとに だいじゃ神社を
ありがたいとおもったよ。

- ⑩「おじいちゃん そのだいじゃ神社って
いま どこにあるの？」
「ああ・・・
すいがい で ながされてしまって、
いまは もうないんだ。
あのだいじゃは、
ここから うみに ながれて行って、
もしかしたら りゅうになって てんに
のぼっていったかもしれないんだ。
りっぱな だいじゃは
てんに のぼって りゅうになるって
いわれているからな・・・」
おじいさんは そう いうと
タモの木の こずえを みあげました。

「おじいちゃん ほら だいじゃが
りゅうになってるよ」



- 〔16〕『郷土誌「北の里のあゆみ」』郷土誌編
集委員会 1996年〔平成8〕9月
大蛇神社

明治十七年に当時の裏の沢ホロンベツ川
南岸に入植した久保武右エ門と岸本権平の
土地の境界近くにヤチダモの老木が空洞に
なって立っていた。開墾する度に、ヨシの

根や竹の根などを老木の回りに何年も積み
重ねて来た。

晴天が続いて乾燥した或る日、久保武右
エ門がその芥山に火をつけた。約一週間も
燃え続けたが、四日目頃になって老木の根
元から紫色の油が流れ出て今迄赤く燃えて
いた火が青い火となった。やがて一週間位
で火が消えたので燃え残りの老木に梯子を
かけ空洞の中を覗いて見ると、白骨になっ
た大蛇が丸く髑髏を巻きその真ん中に直径
十五センチ程もある頭の骨が乗っかってい
た。

大蛇が中に入っていたとは何も知らずに
焼き殺してしまった久保武右エ門は可愛そ
うな事をしたと思い、せめてもの供養をし
ようとその骨のほとんどを自宅に持って帰っ
てお祀りをした。

その後、祟りがないようにと久保武右エ
門らと同じ年に中の沢に入植した流田辰次
郎が中心となって久保武右エ門の屋敷の河
川敷地内に祠をつくり大蛇の霊を祀った。
これが所謂大蛇神社である。

しかし、久保武右エ門の家には不幸な事
が続いた。子供が成長して一家の働き手にな
る歳頃になると不思議な病にかかって死亡
した。そのため久保武右エ門は大正初め
頃、他に土地を求めて立ち去った。

その跡地を隣に入植していた渡辺一郎兵
衛が買って大蛇神社を守り続けた。二代目
の政太郎の代になって住宅を久保武右エ門
の屋敷跡に建て替えた。四代目の忠の頃にな
って馬が怪我したり乳牛の繁殖に不運が
つきまとい「これは大蛇の祟りでは」と悩
んだという。

年月が経ち大蛇神社も当時の遺物のよう
に時代の変化と共に忘れかけていた。

昭和三十六年七月二十四、五日の道央一
帯の豪雨で、裏の沢川の上流にある五反歩
の溜池の堤防が決壊して、沢一面が一時冠
水する大水害となり、その時に川岸に建て

武右エ門は「毎晩、俺の夢枕に現われて『火を消して下さい、…』と、たのんでいた長い髪の女性は“大蛇の化身”だったのか」と思うと、急に体中に寒けがしてきたのでした。

大蛇は「海に千年、山に千年、この地上に千年と、三千年をこの世で修行し、神様に許されて龍となって天に昇って行く」と伝えられている魔力を持った動物。知らない事とは言いながら、その大蛇を焼き殺してしまったのでした。

この話を聞き、祟りを恐れた村人たちは焼け残ったタモの老木の傍に小さな祠を建て、大蛇の霊を祀ったのです。

この祠が後年「大蛇神社」と呼ばれるようになったのです。

だが武右エ門一家には不幸な事が続きました。大事な三人の息子が働き手になる年頃になると不思議な病にかかり、次々と死んでしまったのです。

武右エ門一家は寂しさのあまり、この地を手ばなし、他の地を求めて立ち去って行ったのでした。

大蛇の祟りはそれだけで終わりませんでした。

武右エ門さんの後に入ったのが渡辺さんでした。その渡辺さんの牛や馬が原因不明で次々に死んでいくのです。困り果てた渡辺さんは“占い師”に相談して、占いに従って家畜舎を改造し、神主さんに「おはらい」をしてもらいました。

それからは、牛や馬に怪我や災難がなくなり、その後、大蛇の祟りの話を聞かなくなりました。

*昭和の初め頃、ホロンベツ川（現在の裏の沢川）＝北の里＝が大洪水のため氾濫して、大蛇神社は押し流されてしまい、現在はその跡さえも残っていません。

[19]『郷土紙芝居 11話 きたひろ昔あったとさ』北広島市図書館 ゆずり葉の会 平成15年 [2003] 8月
「大蛇神社」(北の里)



今から100年ほど前、今の北の里に入植した久保武右エ門さんの畑の隅に、ひときわ古いタモの木が生えていました。ある日、老木ですっかり空洞になっていて使い道もなかったのが、だんだんじゃまになって焼き払うことになりました。火をつけると何と1週間も燃えつづけ、不思議なことに4日頃には、真っ赤に燃えていた炎が青色に変わり、木の根元から紫の油が流れだしました。その頃から武右エ門さんは、毎晩のように夢を見るようになりました。最初は美しい娘が「火を消してください」と頼むのですが、次の日からはその女の人はだんだん年をとっていき、最後にはガイコツになった姿で「お願いします。火を消してください」と頼むのです。武右エ門さんは驚い



て、老木のほこらを覗いてみると、15cm程もある頭の大蛇がとぐろを巻き、口が大きく開いていたということです。

蛇のたたりを恐れて、武右エ門さんは、村の人たちと小さなほこらを建ててお参りをしました。それで「大蛇神社」と呼ばれるようになりましたが、大洪水などでほこらも流され、お話だけが語りつがれていま⁽²⁾す。

〔20〕『写真でみる北広島のあゆみ』（開村120年）北広島市 弘文社 平成16年〔2004年〕1月
大蛇神社

広島市街から共栄を過ぎて北へ約三軒で裏ノ沢川に達する。川の手前を右に曲り、南幌町に沿って川に沿い約二百米あまり行くと、そこが岸本兼松さんのお宅である。

岸本兼松さんの祖父権平は明治十七年、和田郁次郎に従ってこの広島に入地して以来、百年三代に涉って努力し、今日の地位を築かれた広島では最も古い御家柄であるが、その岸本さんも他の人達と同様開墾当時は今では想像も出来ないような苦労の連続であった。

岸本兼松さんの母親トモさんは次の様に語った事があった。

「住居は葎茸さか草茸さ、土間には草を敷き並べそのうえに筵を敷いて寝た。醤油樽を真ん中から切り、一つは足をふくの、他の一つは顔を洗うのに使った。稲穂が出そろう頃、霜害のため収穫皆無になったため満足に喰べるものがなく、フキ、オンバイロ、ヨモギ等もよく喰べた。馬鈴薯が常食で、その中にオンバイロが沢山這入って居り、子供心にも、オンバイロを覗いて薯を沢山入れて下さいとせがんだこともあった」そんな生活であった。

又、開墾の方法も、明治二十二年、北海道庁発行の「北海道農業手引草」と云ふ開

墾の為の案内書があるが、それに依ると、「移住地に着の上は、直に伐木に取り掛るべし。立木は雪際より切倒し、幹の直なるものは居小屋、又は納屋材とすべし。左なきものは薪其の他の需要に供し、其の他用に堪えざるものは取まとめて焼捨てるを常とす。雪後は、前に伐置きたる大木の根株はそのまま残し置き、小さき木の根及横にはびこりたる枝根はなるべく掘取りて、之を小柴と共にかき集めて焼払い、漸次、開墾に着手すべし」

こんな風にして鋤入れが始まるのであるが、笹の根が網の目のよう、一鋤耕すにも数回打ち込み、ようやく一鋤起こすと云う程度、その労力は莫大なものであった。

土地が乾燥するのを待って、笹の根、木の根などを集めて焼払うので天気の良い時などは数条の煙が立のぼっているのが開墾地の風景であった。

明治三十年の頃の事であった。

岸本さんの隣家は、やはり明治十七年、岸本さんと一緒に入地した仲間の一人、久保武右エ門である。この久保さんと、岸本さんの土地の境界に、数百年を経て、直径二米にも余るタモの老木が立っていた。この老木も寄る年波には勝てず、すっかり空洞になっていて用途のないまま開墾の邪魔になる木の根、竹の根などをそのまわりに何年も積重ねて来たが、ある時、久保さんは焼払おうとして、之に火をつけなのである。

忽ち、真っ赤な炎をあげて燃上り、約一週間にも涉って燃え続けることになるが、四日目頃から、今迄赤く燃えていた炎が青い色に変わり其後、この木の根元から紫色の脂が流れ出て来た。不思議に思った久保が燃え残った老木に梯子をかけて、空洞の中を覗いて見たが、思わず転げ落ちんばかりに吃驚したのである。空洞の中に、今は焼かれてすっかり白骨となった大蛇が丸くと

ぐろを巻き、真ん中には十五糎程もある頭の骨が乗っていて、大きく口を開き、苦悶した様子さえ見えるものである。

久保はその骨を持ち帰って自宅に祀った。或日、江別からこの話をきいたと云う老人が来て、大蛇の骨はオコリ（マラリヤ病）によく効く薬、是非、譲ってほしいと云って来たりした。

然し、大蛇は「海に千年、山に千年、この地上に千年、三千年をこの世で修行し、許されて龍となって天上に昇って行く。」と伝えられている魔力を持った動物、知らない事とはいいながら、これを焼き殺して終ったのである。祟（たたり）を恐れた人達は焼残った老木の傍に小さな祠を建て、この大蛇の霊を祀った。これが後年「大蛇神社」と呼ばれるようになったのであるが、これを建てたのは、やはり明治十七年、岸本さんや、久保さんと同時にこの広島に移住した流田辰次郎であったといわれている。

其後、昭和の初め、その頃、ホロンベツ川と呼ばれていた現在の裏ノ沢川が大水害のため氾濫し、この大蛇神社をも押し流して終った。その為、現在はその跡さえも残っていない。

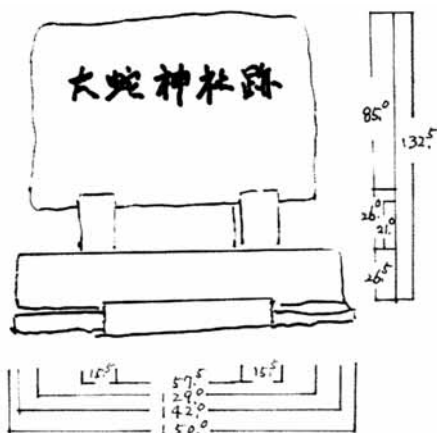


〔21〕『郷土研究 北ひろしま 新版 碑は語る』第18号 大谷義明編著 北広島郷土史研究会 平成17年〔2005〕12月

【碑文】

大蛇神社跡

平成10年9月吉日 本禄哲英 著



(後)

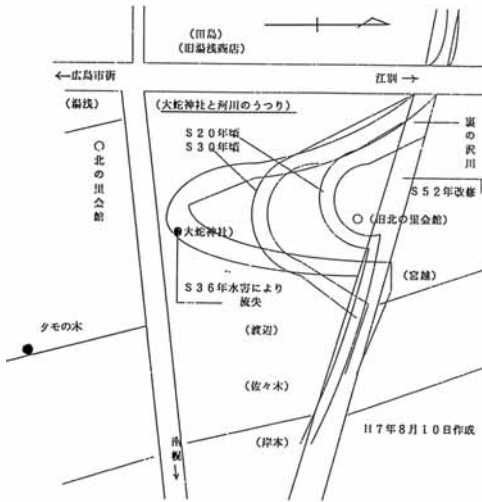
大蛇神社のいわれ

明治三十年初頭の頃のこの辺りに大きなタモの古木があって開拓のためにこれを焼き払ったところ焼跡から大蛇の白骨が現れました。人々がその祟りを恐れて祠を建て篤くこれを祀り後に大蛇神社と呼ばれていましたが、昭和三十六年集中豪雨による裏の沢川の決壊とともに、流失してしまいました。

ここに改めて碑を建立しこの伝説を永く伝えるとともに併せて開拓の先人の苦労を偲びその功を讃えようとするものです。

平成十年九月吉日

渡辺 忠



第3章 大蛇神社伝説の生成（語り手等）の背景

第1節 移住前

酒井喜重が「村の先駆者たち⁽³⁾」の部分に北海道・現北広島市の明治期入植移住者の様子を以下のように記述している。

和田郁次郎の村づくりは次のように進行していた。

明治14年、和田郁次郎は同土、谷川左エ門、細江一、河野正次郎等と共に北海道開拓計画を検討していた。

明治15年5月、和田郁次郎は河野正次郎と共に移住調査のため北海道に渡り各地を行脚す。

明治16年4月、和田郁次郎は単身で渡道し、北海道庁にて広島開墾地を選定す。こ

の地は当時札幌郡月寒管轄下に在った。

同年6月に谷川左エ門は青年、村上源九郎、松田岡十、武田与一、谷川倉助の4人を連れて渡道し、団体移住者の仮小屋1棟を建設した。

明治17年5月、細江一は第一次団体移住者18戸を引率して開拓地に入植す。

広島県の宇品港より乗船した第一次団体移住者が小樽港に入港したのが明治17年5月17日で直ちに小樽に上陸した。小樽から札幌迄歩いた者や小樽から銭箱まで汽車に乗り銭箱で下車して札幌迄歩いたが小樽から2日もかかった者もいた。（岸本トモさんの談）移住者は豊平の旅籠（旅館）に集結し広島開墾地からの迎えを待っていた。

豊平から広島開墾地に行くのに現在の国道36号線（明治6年に開通）を通して大曲より輪厚川に向かって入った。途中（吉本文蔵さんの処あたり）に板小屋が建っていた。此の辺までは牛を使役して木材を搬出していたのでベコ道（牛が歩いた道）があった。輪厚川沿いに下って行くと塚本さんの附近を流れている川が馬蹄形に曲折していたのでその川にそれぞれ丸太を一本ずつ渡し（後に此処を2本橋と呼んでいた）て渡り、更に下って今の大正橋の処に丸太を一本渡し（後に此処を1本橋と呼ぶ）て渡った（岸本トモさん及山本直次郎さんの談）輪厚川が中ノ沢原野にさしかかった場所（即ち現在村の発祥地記念碑建立の所）から川に沿って下の方に11棟の仮小屋が建っていて18戸がそれぞれ分宿した。これが明治17年5月23日のことであった。此の仮小屋から配分された土地に通って森林を切り倒して家屋を建て、「村づくり」が始まった。

年次開拓移住者は次の通り（単は始めに単身で移住した者）

明治16年4月、和田郁次郎（単）

明治16年6月、谷川左エ門（単）村上源九郎（単）松田岡十（単）武田与一（単）

長谷川倉助(単)

明治17年5月, 細江一(単)大谷盛蔵, 西村佐一郎(単)村上源九郎, 岸本権平, 住田恒太郎, 橋本喜兵衛, 松田岡十の家族, 武田与一の家族, 武田権八, 岩見田彦八, 中西梶三郎, 流田辰次郎, 小谷三兵衛, 平山熊次, 沖京次郎, 沖芳太郎, 竹永富助, 山本菊太郎(単)和田郁次郎の家族

明治17年8月, 木村為五郎(単)久保武右エ門(単)内本喜八, 藪本茂左エ門, 三浦徳三郎, 村上喜代太郎

「配分」された土地の入植開墾から北海道移住生活が始まる。その開墾生活については後年余裕が少し出来た時、話し始めるようになる。また、郷土の歴史を記録・研究する人達が出て来た。その事によってそれぞれの先祖の苦労を知り、顕彰するようになる。その思いを北広島市誕生の平成8年9月1日に当時の教育長小野勝見氏が以下のように本稿第1章〔18〕文献の序文に端的に以下のように記述している。

この北広島に本格的な開拓の鋤が入って120余年, 今日までの時の流れはいったいどうで, どう語り継がれてきたでしょう。

昔ばなしはその時代, 時代にその土地に生きてきた人々の暮らしの中から生まれたもので, その当時の生活の歴史を物語るものといえます。

かって北広島も, 空も見えないほどの原始林におおわれていました。

北海道のこの地を新天地を定めた和田郁次郎が, 明治16年12月に調査に入った時, 猛吹雪に遭い, その時二匹の狐が道案内をしてくれた話や, 太鼓の音を頼りに測量をし道路を切り開いた話, 千歳川を帆掛け船でお嫁さんがきた話等など, 人々は北国のきびしい自然との闘いの中で, ゆたかな北広島の未来を夢見てがんばり, 今日の北広

島を築いてきました。

私たちは, その時々の暮らしの中から生れてきた話を一つの財産として, 親から子へ, 子から孫へと語り継いでいきたいものです。

この, だいじゃ神社のお話を, 北広島に“むかしあったとき”と, 子どもたちに読んであげてくだされば幸いです。

第2節 語り手とその家族

「大蛇神社」の語り手岸本トモは武田良助の三女として生まれて, 明治24年17歳の時, 岸本謙太郎と結婚する。大蛇神社の最初の聞き手酒井喜重はトモ93歳の時この伝説を聞いて記録している。また, この酒井喜重が岸本家の状況を次のように記述している⁽¹⁾。

初代岸本権平の移住日は明治17年5月23日である。広島県高宮郡九村の生れで農業を営み小池性を名乗っていたが後, 岸本性を襲名した。

青年時代に西郷隆盛の新規隊に従軍し西南の役に出陣した。その戦乱のときに敵鉄砲の弾丸で頬が凹んでいた。戦役後に権平は西郷隆盛宛に給料の請求をしたときの書類を兼松さんが見たことがあった。

明治17年に和田郁次郎の広島村第一次開拓移住団の一員として開墾地1万坪の貸下げを受け銃を鋤に代えて開墾に精を打ち込んだ時は速に年齢58才の高齢であった。妻マキは33才, 長男兼太郎は15才, 長女トヨは9才, 次男兼平は6才の5人家族を以て開墾に農耕に一致協力して家計の繁栄を築いた。

明治25年の頃, 光顕寺建築の折り権平は建築資材集めを請け負ったところが材質厳選のため莫大な借金を背負いその返済に5年もかかった事もあった。後に神社, 寺院の世話役として活躍し部落民の信望も厚かった。明治40年9月23日に死亡す。

2代目 岸本兼太郎

権平の長男兼太郎が父に連れられて本村移住地に入植したときは15才であったが父と共に原始林にて斧をふるい一人前の労働力を発揮した。明治24年に武田良助の三女トモさんと結婚し夫婦共ども農業経営に努力した。農耕に続いて早くから酪農にも励み益々家門の繁栄を築いた。大正3年より大正10年の間4期に亘って広島村会議員に推選され村の発展のためによく努力された。昭和10年1月18日に65才で村民に惜しまれながら喪くなった。

岸本 トモ

妻のトモさんは今尚健在で村内唯一の古老人で今年93才である。トモさんは武田良助の三女で安芸国高宮郡九村にて明治7年7月17日に生れた。兄の武田与一は明治16年10月に和田郁次郎が移住者の仮住宅建築のために連れてきた青年4人の内の1人で家族より一足先に渡道して来た。父の武田良助、母オベン、長女ワカ、次女オトワと末の私トモの4人で第一次団体移住者の中に混じって渡道した。トモさんは遠い昔を想い浮べながら村の入植当時からの遷り変わりや開墾の苦労話を懐かしそうに話して下れた。

移住者を乗せた船は3月に宇品を出航した。

船の中では移住者たちは毎日歌ったり踊ったりして楽しかった。船の弁当は重箱詰めで毎日鮭のおかずで臭くて食べられなかった。船は小樽に着きそこから銭函まで汽車に乗りそのあとは札幌迄歩いた。豊平の旅籠屋で2日程泊まった。その旅籠屋の周囲に5、6軒の草葺屋があった。父は餅を買ってくれたその代金は1個1銭であった。兄の与一が迎えに来てくれた。荷物を背負ったり担いだりして運んだ。

大曲から入って中ノ沢に到る途中に仮小

屋（屋根が板で葺いてあった）があり其処で休み弁当を食べた。馬車（三輪車の荷馬車）に丸太を積んで赤牛（使役牛は主に赤毛の牛）が運搬していた。広島開墾地に着いたのが5月23日であった。輪厚川沿いに建っていた板小屋は柵葺きと草葺きがあった。土間に草を敷き並べて其の上に筵を敷いて寝床にした。醤油樽を真中から切り一つは足を洗い他の一つは顔を洗うのに使った。移住者が最初に入った仮小屋を和田小屋と呼んでいた。窓はなく入り口には筵を吊るしてあった。入植した年に一反歩程開墾してあった（兄達が開墾した）水田に米（種粃）を蒔いた。稲穂が出るころに早霜のために収穫皆無となった。満足に食べるものがなくフキ、オンバイロ、ヨモギ等をよく食べた。又馬鈴薯の中にオンバイロが入っており子供心にも「オンバイロを除いて薯を沢山茶碗に入れて下さい」とせがんだことがあった。冬の夜は炭のコモ編みで1枚が1銭5厘に売れた。その金で米を買って食べた。米櫃に鍵がかかっていたので週に2、3回より食べられなかった。北海道に米が沢山なる聞いて来たのにこのような食事が毎日続いた。男達は炭焼きに出た。この年に谷川事件があった。谷川奎左エ門が三里塚で落馬して死んだ。谷川は村上孫平の甥子であった。

11才（明治18年）の夏、焼山（今の月寒）にバツタ捕りに父に連れられて行った。バツタは雲のように大群で襲って来て農作物に大被害を与えた。バツタ係官からバツタを入れる袋を貰って一杯になるまで捕まえた。それを土に穴を掘って埋めた。父は一日働いて18銭、子供は無賃銀、青年は20銭の労働賃銀であった。夜はテント張りの小屋に泊まった。父は食糧として米3合と子供は1合貰ってそれを粥にして食べた。

14才（明治21年）の頃、丸太の皮剥作業に出た。一日働いて7銭から8銭の労働賃

銀であったがハサ木の場合は一本削ると8厘貰った。当時の履物はケハンにツマゴを穿いて働いた。

17才(明治24年)の時、村上孫平の媒酌で岸本権平の長男兼太郎と結婚した。筆筭は兄の与一が手製で造ってくれた箱筆筭である。結納金は5円に酒一升貰った。親からオコシとジュバンを作って貰った。結婚式の時は不断着のまま歩いて行き媒酌人の村上は風呂敷包を背負って一緒について来てくれた。村の青年達が集まって来て何にかにと悪戯するので嫌であった。姑のマキさんは美人で歌を唱いながら手で畑の草を掲取り朗らかに仕事をする人であった。当時の岸本の畑には小豆、大豆、馬鈴薯など植えてあった。食事はヨモギに米を入れて食べたり、オンバイロ、ウバユリも多く食べた。又麦飯にソバ団子が主食であった。自宅から700間程離れた千オ川に鮭がのぼってくるので捕獲した。商売人から買っても鮭1本が2銭で買い各農家の軒下に吊るしてあった。酒一升が20銭であった。

22才(明治29年)一日の労働賃銀は10銭から15銭であった。隣家の久保と岸本の間の境界にヤチダモの老木が空虚になって立っていた。開墾する度にヨシの根や竹の根等を老木の囲りに何年も積み重ねてきた。久保はその芥山に火をつけた処約一週間に亘って燃え続けた。4日目頃から今迄赤く燃えていた火が青い火になって燃え続けた。その後老木の根元から紫色の油が流れ出てきた。久保は燃えのこりの老木に梯子をかけて空虚を覗いて見ると白骨となった大蛇が丸くとぐるを巻きその真中に5寸角程もある頭の骨がのっかっていた。久保はその骨を家に持ち帰った。或る日、江別から骨の話聞いた老人が来て大蛇の骨はオコリ(マラリア病)によくきく薬であるから譲ってくれと云って来た者もあった。「大蛇は海に千年、山に千年この世に千年いて3千

年すると夫界に昇って行く」と云う物語があった。トモ老母の話はとめどもなく続いた。

岸本権平の長女トヨは木村為五郎と結婚し農業に従事した。夫の為五郎は山子として歩き後に広島村郵便局集配人として勤務した。長男が早来の追分鉄道機関区へ転勤すると親も一緒に行き又岩内に移動して病死す。為五郎69才妻トヨは64才で死亡した。

次男の兼平は農業に興味なく広島村尋常小学校卒業後、函館電信学校に入学す。後、加賀谷善作の長女テルと結婚し広島村郵便局の和田局長時代に勤務していた。日露戦争に出征し一時満州に渡りたるも再び札幌に復帰し40余才で病死した。

第4章 伝説の内容

* 参照：図表・北広島の民間説話
(伝説)「大蛇神社」(129p)

第1節 伝承の異同

岸本トモ談を「大蛇神社」伝説の生成とするところの伝説は大別すると二種類に分類される。大蛇を焼き殺した行為がさまざまな災いを呼んだのでお祓いしてもらったら災いは無くなったという慰霊型とお祓い後の新しい入植者が順調に生活する事が出来たという感謝型である。慰霊型は、岸本トモが語った「久保はその芥山に火をつけた処約一週間に亘って燃え続けた。4日目頃から今迄赤く燃えていた火が青い火になって燃え続けた。……」という部分が山田甚エ門の話も加味して詳しく記述されるようになった。大谷義明氏や「郷土大型紙芝居」〔4〕「紙芝居・郷土の絵本2 だいじゃ神社」〔15〕等では夢枕に日毎に容貌が変わっていく女性を登場させている特色がある。感謝型は、「紙芝居・郷土の絵本2 だいじゃ神社」の後半部分が(本稿114p以降)にあるように伝説内容の描写が

詳しく記述されている。例えば、岸本トモの話や絵本づくりのために聞き取りした結果をもとに、上記紙芝居の⑭～⑯の部分を加味している。同時に、石碑を建立した渡辺忠氏は後継者の事等を考慮して、大理石を使用して永久に顕彰しようとした。これらの動きが図書館関係者や行政の街づくりの活動の中に位置付けられた。

第2節 上記以外の伝承

附図（本稿129p）中にあるように石橋豊次郎氏、遠藤氏、藤坂氏等の大蛇の数量や焼き殺されなかったという話もある。しかし、話としては上記前節のように一定の定着をみている。

第5章 紙芝居〔図象〕（視覚化）の変遷

附図：紙芝居・挿絵（本稿108p～）等の図像を通して伝説「大蛇神社」がより一層北広島地域の中でイメージ化されて行った。また、伝説生成の関与に文学者・郷土史家・図書館・行政・新聞社等が関わっていた。これらから伝説は常に創り出されているという状況を知ることが出来る。

第6章 まとめ

1. 広島県から移住した人達が開墾した頃の苦労を百年後になって語った事が伝説の生成の始めである。人口8,000人の村の札幌市のベッドタウン化による激変、生活の安定、過去への郷愁と次代への継承心がこの伝説を生成した。
2. 伝説は大谷義明氏、荒木順子氏、文学者、図書館関係者、行政当局、新聞社をはじめとする人達が関与して、伝説は地域住民等に広められ、図像化され、内容が創りあげ

られて行った。

3. 住民意識形成に関わって、新聞や市広報上での紹介記事の果たした役割は大きい。「北海道新聞」「報知新聞」「読売新聞」「ひろしまジャーナル」「広報きたひろしま」等に合計14回掲載されている。
4. 紙芝居が二種類創作されている。一つは大人創作のものである。それは大蛇の慰霊（祠信仰）で終わっている。それに対して小中学生16名が参加しているもう一つの紙芝居は、慰霊後牛飼いで生活も豊かになり、大蛇も龍になって天に昇ったという感謝型（記念碑）になっている。後者は子供達の想像力と教育的配慮が紙芝居の背後に働いている。この感謝型は石碑を建立した渡辺氏の思いでもある。
5. 大蛇が移住開墾期に焼き殺されたという事実と開墾の厳しさの中で起きる不幸が結びついて伝説が、郷土史家・図書館関係者・文学者等によって「繰り返えし」語られ、記録化され、図像化等されて行く中で伝説がいくつかの変容を含みながら伝承されて来た。その期間は1972-2005年の約30年間である。
また、伝説伝承は〈語り・口承〉→〈読み・書承〉→〈読み聞かせ・口承〉そしてネット化（図書館）というように継承されている。
6. 岸本トモの酒井喜重に語った話が、大谷義明氏によって山田甚エ門の話を加味して大蛇の霊が夢枕に立つようになる。内容が詳しく描写されるようになり、それが絵本・紙芝居というようになるに従って内容が膨らんでいる。個人等の関与の大きさを認めることが出来る。

7. 村落形成の原動力になったのは共同体意識である。厳しい自然とのたたかい、家族の健康、後継者育成、精神的支えを維持する事が出来た人々が今日の繁栄を勝ち得た。さらに心ならずして窮地に追い込まれ離村せざるを得なかった人達をも含めて個々の状況を探り、民間説話の生成・変容・定着の問題を今後考察しなければならない。
8. 北海道内外（特に広島県等）の大蛇信仰と北広島の大蛇信仰との関連に関する考察は今後の課題である。
9. また、北海道の民間説話の成立する村落共同体形成の問題は、祭祀の視角だけでなく民俗芸能・都市民俗学の成果等の視角をも含めて今後考察して行かなければならない。

注

- (1) 『郷土研究 広島村』第1号昭和42年1月
2223 p
- (2) 現在、神社跡には石碑が建立されている。
- (3) 前掲書18 p
- (4) 注(1)と同じ

参考文献

- ・『国文学 解釈と鑑賞』特集創られた伝説 2005年10月第70巻10号
- ・荒木博之、野村純一、福田晃、宮田登、渡邊昭五編『日本伝説大系』別巻1・2 みずうみ書房 平成元年10月・平成2年6月
- ・倉石忠彦『都市民俗論序説』雄山閣 平成2年6月
- ・福田晃、常光徹、斎藤寿始子編『日本の民話を学ぶ人のために』世界思想社 2000年10月
- ・野村純一編『昔話伝説研究の展開』三弥井書店 1995年3月
- ・堤邦彦、徳田和夫編『寺社縁起の文化学』森話社 2005年11月
- ・吉野裕子『蛇 日本の蛇信仰』（ものと人間の文化史32）法政大学出版局 1979年2月
- ・笹間良彦『蛇物語 その神秘と伝説』第一書房 平成3年7月

- ・阿部真司『蛇神伝承論序説 清姫の原像を求めて』新泉社 1986年9月
- ・竹原威滋・丸山顯徳『世界の龍の話』（世界民間文芸叢書別巻）三弥井書店 平成10年7月
- ・松谷みよ子『現代民話考9』立風書房 1994年1月

謝辞

荒木順子氏、大谷義明氏、久保井正行氏、北広島市図書館関係者、資料整理を手助けしてくれた中村拓人氏、日本口承文芸学会の皆様をはじめとする多数の方々にお世話になりました。衷心より御礼申し上げます。また、今後ともご指導・ご協力いただければ幸いです。

北広島島の民間説話 (伝説) 「大蛇神社」

作成：荒木順子・(阿部敬夫)

(1) 郷土研究広島村(1号) 1967 (S42)	(2) 郷土研究ひろしま(3号) 1977 (S52)	(3) 芋蕨でふる広島の男 99号 1984 (S59)	(4) 郷土大蛇伝しばい 1384 (S59)	(5) 91北海道昔ばなし (追加編) 1989 (H1元)	(6) あの出からのことづけ 松谷みよ子著1385 (S60)	(16) 北の里のおゆみ 1996 (H7)	(13) 郷土絵本づくり (株誌) 1986 (H7)	(18) 北広島のおゆみ 1997 (H8)
時代 明治29年	明治30年頃	明治30年	100年前	武右エ門の土地	明治20年代	久保武右エ門・岸本 槽平の土地の境界	岸本・久保の境界	久保・岸本の境界
場所 岸本・久保さんの境 界	左同	左同	武右エ門の畑の隅	加藤好江(北広島 在住)	加藤好江(北広島島 在住)	ヤチダモの老木	タモの木	直径2mのタモの木
語った人 岸本トモ(当時83歳)	左同	左同	大谷義明(取材)	大人3人が手をまわす ほどの大木	樹齢100年、直径 2m、タモの木	明治23年頃	明治30年頃	武右エ門
木 ヤチダモ	タモの木(直径2m)	左同	タモの木	持主の男	武右エ門	左同	明治23年頃	武右エ門
水を燃やした年 明治29年	明治30年頃	久保	武右エ門	持主の男	武右エ門	左同	明治23年頃	武右エ門
燃やした人 久保武右エ門	左同	左同	左同	左同	左同	左同	明治23年頃	武右エ門
燃え方 1週間経く。4日目 頃から赤い火が青い 火、紫色の油の流出	左同	左同	左同	左同	左同	左同	1週間燃え、5日目 に色が変わる	1週間燃え、5日目 に色が変わる
蛇 5寸ほどの頭。とぐ ろをまいた白骨	15cm。とぐろをま いた白骨	左同	左同	左同	左同	左同	焼き尽きたら蛇の骨 があった	頭15cm
持って帰った人 久保武右エ門	左同	久保	左同	武右エ門(一部を)	武右エ門	久保武右エ門(ほとん ど)	患魔の人がぐすりに 灰をもらった	タモの木のそば
オコリのくすり 江別の人から依頼	左同	オコリのくすり	建てたことだけ					
祠の建立	老木のそば							
建てた人	流田辰次郎(村役場 近くの人)	左同		村人と一緒		流田辰次郎が中心	流田辰次郎	村人
夢			毎晩夢を見る女の 人 1. 長い髪をふり 2. 髪を振り乱した 3. 髪が抜け落ち、皮 4. 白骨の姿	火をつけたその夜 から枕もとに女が 現われる。様子は 同じ			助けて下さい。火を 消して下さい。(山田 喜三郎の話) 蛇を 聞いた (大谷)	1. 長い髪の女の 人 2. 髪をふり乱 3. 髪が抜け落ち、 白骨の姿 4. 白骨の姿
呼び方	後に大蛇神社	左同	大蛇神社				蛇の神社→大蛇神社	
守り人							渡辺家	
流失				昭和のはじめ(洪 水)	昭和36年(洪水)	昭和36年(洪水)	昭和36年(洪水)	昭和の始めの洪水(牛 ロンベツ川)
その他の話	元村長 石橋豊次郎氏 (S60頃) - 郷土紙 芝居が出来上がった後、その話には白蛇1000 匹だったと聞いている。 学芸員 遠藤さん (H9) 南の里 塩原さ んのところから1匹逃げてきた。祠を建てて 祀っている。			3人の息子が原 因不明の病で死 にす 死は生や馬が次々 は死にす 占師のことがば ばばに 神主におはらい をしてもらって 作次郎→当時未 だ本名を書き れなかった	3人の子どもの不思議な 病 ・渡辺忠 (四代目) 馬の怪我、乳牛の 繁殖に不運が続く	昭和5年建て直し (藤坂さん74歳) 小学校4年生の頃 小蛇の話 渡辺さ んの祖母の話(岸 本トモさんかきく) その木が燃えてな くなくなった ・セトモンの白蛇の お願言さんをお参り して置いた(一子) ・牛や馬が次々死 占いや馬に相談。酒 占いや馬を併せて お参りした。	昭和5年建て直し (藤坂さん74歳) 小学校4年生の頃 小蛇の話 渡辺さ んの祖母の話(岸 本トモさんかきく) その木が燃えてな くなくなった ・セトモンの白蛇の お願言さんをお参り して置いた(一子) ・牛や馬が次々死 占いや馬に相談。酒 占いや馬を併せて お参りした。	久保さんの息子3人 が不思議な病にかか る ・渡辺さん占いで相 談。家畜舎を改造。 神主さんに「おはら い」をしてもらいま した。

[Abstract]

A Study of Hokkaido Folk Tales No. 4:
An Examination of the Legend The Red Snake Shrine
in Kitahiroshima, Hokkaido

Toshio ABE

The legend of The Red Snake Shrine is about a hard working pioneer named Buemon who finds a burnt snake in the hollow of a huge old ash tree he cut and burned during the cultivation of Hiroshima. This legend was first told by then 93-year old Tomo Kishimoto in 1896. (Published in the first issue of The Local Research of Hiroshima Village in 1967.) Since then, it has been introduced in a collection of photographs, picture cards, children's books and local history books by local historians and librarians, and has been dramatized nine times. The background of this legend is the superstitious folk belief of the need to prevent the half-killing of animals especially snakes and frogs. Later, the cause of the death of landowners' family members after the memorial services was discovered to be lung disease. As above, one can find that oral literature (in this case, legend, superstition etc.) has always been created. Therefore, I believe that when thinking of the future of oral literature studies, the creation of oral literatures by local historians and librarians in a short period of time (about a century) must be included.

Key Words: Tomo KISIMOTO, Yosiaki OHTANI, Hiroshima Village